

## 講義内容

### 教育哲学研究 I

Pedagogical Philosophy I

2単位

教育の目的を「人格の完成」「人格陶冶」「善き人間の形成」というような形で理解するとすれば、そこには必ず道德の問題が関わってくる。本講義では、善き人間（人格者）になるとはどういうことかという観点から「正義」や「自由」の意味について理解しつつ、それらと教育との関係を哲学的に問うて行きたい。すなわち一性（いつせい）を問う哲学的な問いとしてまずは「正義とは何か」「自由とは何か」を掲げ、正義の女神に象徴される「秤」「剣」の意味や、我々が通常有する「欲望の自由」とそれに対立する「道德的自由」などの意味を明確にした上で、そもそも「教育とは何か」という根源的な問いへとアプローチしてみたい。

### 教育哲学研究 II

Pedagogical Philosophy II

2単位

西洋と日本の近代教育思想の成り立ちや構造を知る事によって、教育的なものの方の特質を知る。講義は以下の三領域からなる。（1）近代教育思想の成立と構造（2）近代日本の教育学と教育思想（3）お雇い外国人の見た近代日本の文化と教育

### 西洋教育史研究 I

History of European Education I

2単位

本授業では、日本にも大きな影響を与えた西洋の新教育運動について見ていく。最初に、セシル・レディが創立したアボッツホルム校が、本国イギリス、フランス（ドモランのロッシュ校）やドイツ（ヘルマン・リーツの田園教育塾）にどのような影響を与えたのかを概観し、原文にあたりつつ

アボッツホルム校の歴史や現在の教育について詳しく見ていくことにしたい。

### 西洋教育史研究 II

History of European Education II

2単位

「教育学は如何なる学問か?」この問題は教育学の歴史と共に古く、現在においてもなお未解決のまま問われ続けている。本講義では、18世紀後半に、いち早く大学で教育学を講じ始め、教育学の確立へ向けて腐心し続けてきたドイツにおける教育学の歴史を紐解く。特に、20世紀のドイツ教育学の相貌を規定したディルタイ学派の「精神科学的教育学」に着目し、その教育学理論の特質、敵対する学派との論争点、ナチズムとの関係等を検証し、歴史的意義と今日的意義について考察していきたい。その際、「精神科学的教育学」の代表的思想家から、玉川学園ともゆかりの深いE. シュブランガーとO. F. ボルノーを中心に取り上げる予定である。

### 日本教育史研究 I

History of Japanese Education I

2単位

わが国の教育制度は明治5年の「学制」がスタートである。「学制」から明治12年の「教育令」までの期間を「学制期」という。本講では、I、IIを通して、この学制期にわが国初の啓蒙団体明六社に集結した一連の洋学者らの教育思想をとりあげ、その近代教育史上に果たした役割を検討する。

とりあげるのは、おもに福沢諭吉と西村茂樹である。福沢は、今日なお日本の近代化をめぐる諸問題を考えるうえで、参考にすべき思想家である。丸山真男の卓越した福沢論を手がかりに、あらためて福沢思想の今日的意義を確認したい。『福翁自伝』『学問のすすめ』『文明論の概略』、丸山著『福沢諭吉の哲学』（いずれも岩波文庫版）を用意のこと。

## 日本教育史研究 II

History of Japanese Education II 2単位

今日なお積極的に国民道徳運動を推進している日本弘道会を設立したのは西村茂樹である。彼は、明治6年森有礼、福沢諭吉、西周、加藤弘之、中村正直らとはかって「明六社」を設立し、『明六雑誌』を発行して、啓蒙思想の普及につとめた。

従来西村は、儒学の立場に立つ守旧的思想家と看做されてきたが、現在編纂がすすめられている『西村茂樹全集』(全12巻、思文閣、多田健次編)におさめられた新史料によって、西村が福沢らとともに、開明的思想家であったことが明らかになった。本講では、彼の代表作『日本道徳論』をとりあげ、彼の思惟様式や思想構造の分析を試みる。

## 教育心理学研究 I

Educational Psychology I 2単位

現在、学校現場で生じている学習不振、発達障害、非行、不登校、「いじめ」などの諸問題に対して、最近の教育心理学の研究成果をもとに具体的対応法を検討するのが本講義の目的である。具体的には、成長・発達の概念、認識能力の発達、教授学習や理解のメカニズム、知識を規定する認知的・文化的な諸要因、教育臨床、脳科学、子どもや保護者の教育環境、関係機関との連携等を踏まえ、教授学習活動を推進する事例や教育活動を妨げる事例に対して、どのような対策を実施していくことが可能なのかを検討することとする。知能検査や発達検査を各自で実施できるようにするとともに、各検査の問題点や実際に教授活動にどのように応用していくかを検討することとする。

## 教育心理学研究 II

Educational Psychology II 2単位

児童・生徒の教育活動を支援する上でアセスメントが必須となること踏まえ、面談法、観察法、事例研究法、心理検査法などの各技法、およびそ

これらの理論的背景を習得し、各子どもに対して具体的な対応法を検討できるようになることを目指す。具体的には、各アセスメントの特徴を理解し、どのような事例ではどのような技法が求められるのかを判断する能力を育成する。さらに、従来の検査では不十分な教育上の諸問題に対して、自ら質問紙を作成し、児童生徒の心理分析・行動評価を実施できる心理側の尺度法についての知識(記述統計の基礎や推測統計の基礎、および多変量分散分析や重回帰分析、因子分析、共分散構造分析等の多変量分析)の習得を目指す。

## 教育方法・技術研究 I

Method and Technology of Education I 2単位

「教育方法・技術」に関して求められるのは、「どう教育するか」という解決の方法であることが少なくない。しかしながら、方法はその背後に、「どう解決することがよいのか」という思いが隠されている。したがって、その問題は何なのか、という分析が、その解決を求める前に明確にされなければならない。教育は「耳に快い言葉」によって語られ、それがあいまいなままに実践の場に投げかけられ、現場を混乱させてきた。

そのために、本講では、そもそも「教育」とは何か、という問いを重視し、教育にとって重要な「よい」方法とは何かを、その背後にある考え方とともに検討する。取り上げる題材は受講者の関心を重視するが、言語分析を通してその明確化をはかり、その妥当性を検討する手法を身につけることが目的である。

## 教育方法・技術研究 II

Method and Technology of Education II 2単位

本講では、教育方法研究としての方法論を学ぶ。教育方法は単に子どもを前にした教え方の技能ではなく、教科内容の知識、方法の知識、何よりも学習者についての知識を前提とした授業のデザインの能力が求められる。これは子どもにそって教

えるという「メトード」にほかならない。今日では、教育改革という名の下にさまざまな試みが提案されており、そこでは教育的な用語が使われているけれども、その誤解や教育的な視点から疑問を呈せざるものは少なくない。そのためにも、教育方法・技術の方法論は、上記の3つの要素を検討する力を身につけることが求められる。

授業では、受講者の関心のある題材を取りあげ、教育方法の視点からそれを問い直す。そのため、時には、受講者自身が取り組んでいるテーマそのものを取りあげる予定である。

## 教育行政学研究 I

Educational Administration I 2単位

教育行政に必要な法律知識を確かなものとする。教育基本法や学校教育法、地方教育行政法等の主な規定の意味を検討する。その上で教育行政と学校制度の制度的、社会的意味を理解する。また、戦後教育改革以降の教育政策の大きな展開を理解する。主な内容として、教育行政と法令、国と地方の教育行政機関、教育行政の目的・目標、学校制度・学校体系、学校制度、初等中等教育行政、高等教育行政、生涯学習行政、私学行政を取りあげる。

## 教育行政学研究 II

Educational Administration II 2単位

「教育行政学研究 I」で獲得した知識を発展させ、今日の学校の在り方を考察する。学校設置者と学校の関係は、近年の動向において、学校の自主性・自律性の問題としてとらえ直しが行われるとともに、学校運営に必要な権限と財政基盤をどのように確保するのかが問われている。「人・物・金・マネジメント」をどのように組み合わせ、全体最適を目指すのかを考える。主な内容として、教育行政学と教育経営学、臨教審の改革提案と学校、学校改善の理論的動向、学校参画と学校ガバナンス、学校選択と学校市場、効率的な学校運営、労働市場と学校を取りあげる。

## 幼児教育研究

Early Childhood Education 2単位

本授業では、最初に現在の日本の幼児教育に大きな影響を与えたフレーベルの生涯、幼児教育観を概観し、しかる後、フレーベルの幼児教育思想がわが国にどのように受容され、日本の幼児教育にどのような影響を与えたのか、そして日本の幼児教育の現状はどうかを見て行くことにしたい。単なる講義だけではなく、受講者による発表、また討論も交えて進めていくことにしたい。

## 幼児音楽研究

Music for Early Childhood 2単位

教育の根幹となる乳幼児期における音楽教育のあり方をさぐる。現在、音楽は『表現』という領域に統合されているが、『表現』という領域は指導にマニュアルが作りにくく、かつ保育者自身が様々な表現手段に触れる機会が少なかったことから、子どもたちの表現を感受する能力が不足しているように見受けられる。

この授業では音楽表現を中心に据え、実技を通して、まず自身の表現力を高めることを学ぶ。それに加えて、子どもたちの様々な表現に気づき、それを受け止め発展させていけるような指導方法を検討する。

## 幼児造形研究

Crafts for Early Childhood 2単位

アートやデザインは自己と他己、異なる価値観をもった集団、異なる領域をつなぐ媒体として、社会において新たな役割を担おうとしている。この変化に伴い、造形による教育も新たな役割や手法が求められている。また、デジタル技術の発展に伴う生活環境の変化は、デジタルを操作する人間の基盤的能力としてのアナログ感覚の重要性をますます高めている。本講では、幼児の生活環境の変化を踏まえ、造形による教育の視座からア

ナログ感覚の基盤を形成する幼児の造形表現活動と、義務教育および後の教育の基礎を培う造形表現教育について考察するとともに、考察を踏まえた造形教育教材の開発、造形教材の運用や指導などについて研究する

## 児童福祉研究

Child Welfare

2単位

児童福祉の理念や制度は、家庭教育、学校教育と極めて密接な関連性をもっている。また、近年のわが国の児童福祉制度は、少子社会への変化、児童（満18歳未満の乳児・幼児および少年）を取り巻く家庭、近隣・地域の生活環境、社会環境の変化等に伴う児童虐待の増加をはじめ、保育所待機児童や放課後児童健全育成事業の利用希望児童の増加など、喫緊の課題に例をみるように、大きな変革期にある。本講では、履修者のこれまでの児童福祉および関連領域・分野の学修内容を踏まえて、前半はわが国の児童福祉制度や今日的課題を概観し、後半は履修者の関心のあるテーマを取りあげながら考察する。

## 精神保健研究

Study on Mental Health

2単位

豊かになったわが国では、子どもたちの体の健康状態は、世界でもトップレベルである。一方、心の健康状態は必ずしも十分に保障されているとは言い難い。また、人間の心の状態は体の健康にも大きく影響を及ぼし、特に子どもにおいては、心身相関が顕著である。本講では、まず子どもの心身の発達の特徴について把握するとともに、親子関係や養育環境と発達との関連について明らかにする。さらに、各ライフステージにおける精神保健的問題や精神・神経症状、精神疾患について理解を深める。その上で、現代社会における子どもの精神保健の問題に焦点をあて、家庭・保育現場・学校・社会などにおける対応のあり方や発生予防について考察することとしたい。

## 初等教育研究

Study on Elementary Education

2単位

初等教育の研究の範囲は広く多岐にわたるが、本講では、まず初等教育における本質論、制度論、教育内容・方法論について概観する。その上で小学校教育の特質を踏まえ、教育課程ならびに学習指導等の領域を中心に講述する。

具体的には、教育改革の中での小学校教育の現状、新学習指導要領と小学校教育、学力向上と小学校教育などのテーマを取り上げていく。さらに現在の小学校教育をめぐるさまざまな課題についても、理論と実践の両面から考察することとしたい。

## 小学校授業研究

Curriculum and Instruction in Elementary Schools

2単位

主に生活科と社会科を取り上げ、デューイの教育思想にも学びつつ、思考と表現、習得と活用をキーワードにした今日的な小学校授業の課題について考える。日本における授業研究の歩みを振り返ったり、名人と呼ばれる授業者による代表的な授業を事例に授業の成立条件に関して考察したりする。

また、言語力を育むためにどのような授業が望まれるか、知識と技能の習得や探究的な学びを支える諸条件についても様々な角度から考察したい。

## 情報教育研究

ICT in Education

2単位

情報教育とは、日常の生活や社会にメディアが広く入り込んでいる情報社会において生き抜くために必要な、情報活用能力を育成する教育である。そのため、コンピュータやインターネットに代表される情報技術のほか、普段の生活で用いているケータイやテレビ、さらには身の回りの雑誌やポスターなどまでを広くメディアとして捉え、それらから受けている影響について自覚させる学習指導が必要である。

本講義では、メディア論の基本的な考え方や、我が国の情報教育の課題を押さえつつ、メディアとの

つきあい方をどのように学習指導していくかについて、教材開発や指導法開発を行う。なお、本講義では、受講者による発表・討論を前提に進めていく。

## カウンセリング研究

Counseling Theory and Practice for Children 2単位

現代の教育現場では、子ども、保護者、教員などの間におけるコミュニケーションや関係性の問題が増加している。それは、日本社会の在り方、学校の在り方、家族の在り方、保護者、子ども同士の人間関係などが絡み合って出現した現象ともいえる。カウンセリングの視点から、それらをどのように扱っていけばよいのかを学習する。具体的な事例を通して、子どもの視点、保護者の視点、教員の視点、臨床心理士の視点などから考察し、マニュアル的な解決ではなく、具体的な言葉がけをロールプレイをして学び、問題を解決することができる力を養う。カウンセリングの基礎が身につき、実践できるようになることが目的である。さらに、心理検査やコラージュ療法を体験することにより、自分自身についての理解を深めることも同時に行う。

## 特別支援教育研究

Special Needs Education 2単位

現在の学校教育の大きな課題の一つである特別支援教育について、その対象となる高機能広汎性発達障害児やLD児、ADHD児等を含めた指導の難しい児童生徒の理解ならびに指導の方法、さらにはそうした児童生徒の在籍する学級、学校の運営について、主として自閉症の障害特性などから考えていきたい。

## 学校法人会計

Study of School Accounting 2単位

わが国における学校財政の構造や基本的な枠組みおよび学校法人会計の基準・会計の原則等について概観し、現状や課題について考察する。

学校財政の構造や基本的な枠組みについて説明

できる。また、学校法人会計の基準や原則、決算書の読み取り方や財務分析の方法についても理解し、説明できるようになることを目的とする。

## 学校組織マネジメント

Management in School 2単位

学校の主人公は子どもである。幼児・児童・生徒・学生たちの健やかな成長を育むために、幼稚園から大学まで学校はそれぞれの学校教育目標の具現化に向けて、教育計画を立案し、日々の教育活動を営んでいく。その学校教育活動を運営するに当たっては、教職員がそれぞれの学校教育目標をよく理解し、お互いが知恵を出し力を出し合うことが求められる。そのために教職員には、組織としての学校の役割、学校組織と学校経営のあり方、学校組織と学校管理の関係、学校組織と校務分掌の機能など、学校組織に関わって理解すべきことが多くある。この講座では幼稚園から大学まで実際の学校組織を踏まえ、各段階の学校経営及び学校運営はどうあるべきか、学校の特色を生かした組織をどうかたち作り運営していけばよいかなどを理解し、討議し、新たな学校運営組織プランなどを考える講座としたい。

## 学校リスクマネジメント

Crisis Management in Schools 2単位

いじめ、校内暴力、教職員の不祥事など学校危機管理の様々な課題を見据えながら、今日的に重要度を増している個人情報保護や教職員が理解すべき著作権法、学校への不審者侵入や通学路における犯罪防止、自然災害への安全管理と防災教育などに関しても事例を通して考察する。

学校の内と外の両面においていかにリスクを減らして学校運営に当たっていくべきか、教職員や学校管理者が認知しておくべき課題は何か、具体的な防犯や防災の教材開発や指導法も絡めた学校と地域、関係機関の連携方法についても論じたい。

## 学校教育調査 (IR)

Institutional Research for School 2単位

インスティテューショナル・リサーチ (IR = Institutional Research) におけるデータ収集と分析の方法について学ぶ。IRの必要性が叫ばれるようになったのは、近年、教育機関の認証評価への対応が求められていることと無関係ではない。同時に、各教育機関は教育の成果について具体的に説明することも求められている。一方、IRによって得られる情報は学校経営の改善や安定運営に欠かせないものでもある。ここでは、21世紀の教育課題がこうした質的再編であることをふまえ、学校教職員に最も望まれる能力とされる「データを収集し、分析する能力 (全国大学事務職員調査2010)」を身につけることを目標とする。

## 中等教育研究

Study on Secondary Education 2単位

中等教育研究の範囲は広く多岐にわたるが、本講では、中等教育における本質論、制度論、教育内容・方法論について概観することからはじめたい。その上で中学校、中等教育学校、高等学校の特質を踏まえ、教育課程ならびに学習指導等の領域を中心に講述する。

具体的に取り上げるテーマとしては、教育改革の中での中等教育の現状、新学習指導要領と中学校、高等学校、学力向上と中学校、高等学校などである。

さらに、現在の中等教育をめぐるさまざまな課題についても理論と実践の両面から考察することとしたい。

## 高等教育研究

Study on Higher Education 2単位

日本の高度成長期に大学は社会の「人的資本」需要に応える供給機関として重要な機能を果たしながら拡大してきた。その後の大学数の増加と少子化によって、日本の大学のユニバーサル化は促進される一方、多くの大学が入学定員割れを起こすことにもなった。特に、私立大学は「私高公低」とまで云われたが、Social upward mobility を保証するものであった。し

かし、日本経済の縮小もあって、昨今の大学卒業は就職すら保証できなくなってきてしまっている。

本講義では、上記の大学をとりまくきびしい状況を踏まえ、「大学の機能」「大学の新しい役割」「大学の品質」「大学にとっての顧客」「On Demand Education」「一年次教育」「学力低下」「大学教育費の内部返還率」といったことを中心に、私立大学の今後について考えていく。果たしてこれからの時代において大学には「投資」的性格があるのか、それとも「消費」の対象となるのかを探る。

## 全人教育研究

Whole Man Education 1単位

小原國芳の提唱した「全人教育論」の特徴を探る。小原はなぜ全人教育論を唱えたのか、それは如何なる人間観・教育観に由来するのか、如何なる価値体系に基くのか、その理論は実践とどのように融合して来たのか、そして全人教育論は、西洋及び日本の教育の流れの中にどのように影響を与えてきたのか、また、今日これからの教育にどのような意義を持つのか。

小原國芳の「全人教育論」の理論と実践を総合的・全体的に理解するには、小原が玉川学園を創立するに当たって目標とした「教育12信条」の体系的・構造的把握が欠かせないと考える。この12信条の一つひとつの有す意味とそれらの関係を考察することに重点を置くことを通して、k-16における「全人教育」の実現の在り方について考えたい。

## 脳科学と教育

Brain Science and Education 2単位

教育は高度に心理的な技能である。しかし一方で脳科学の極点からの情動的解釈では、脳における高度の学習過程を誘導する、高度のインタラクションとも言える。心理的な世界と脳の世界のあいだにはまだ溝があるが、最近の脳関連の諸科学はそれを埋める大きな進歩を遂げている。その成果は、多様な学習の場面での特性と、その障害により発生する現象の深い理解につながりつつあ

る。本講義は、教育と学習にかかわる最近の脳科学の知見とその限界を紹介し、実際の教育現場における方法につなぐ努力について議論する。

## 比較教育学研究

Comparative Education

2単位

諸外国における教育制度、教育思想が、相互にどのような影響を及ぼしてきたのかを、主要国の事例から分析する。制度史的、思想的アプローチを織り交ぜながら、教育学の生成と発展を理解する。多くの国で共通する要因を取り出すとともに、その国、その時代の独自性を把握し、その要因を説明できることを目指す。主な内容として、学校の成立、宗教改革と学校、市民革命と学校、産業革命と近代学校、帝国主義政策と教育政策、新教育運動、教育の大衆化、現代社会と教育を取りあげる。

## 特別支援教育実践研究

Practice for Special Educational Needs

2単位

この授業は、現在大きな関心を持たれ、また、現場での対応が急がれている特別支援教育をとりあげる。具体的には、LD、ADHD、アスペルガー、高機能自閉症などをもつ児童、学生の理解や対応を考えるものである。ただ、「実践研究」を標榜する本授業では、担当者自身の経験をふまえ、一般論ではなく、具体的な事例を積極的に取りあげるとともに、実践的な手法に目を向け、受講生の経験なども反映させながら進めていく。受講生は自身の見聞を担当者とともに検討する姿勢を期待する。

## コミュニケーション研究

Study of Communication

1単位

コミュニケーション研究は、まさに学際的な人間研究であり、多くの研究領域がある。

本講においては、教育的コンテクストにおけるコミュニケーションの研究、とりわけ教育的コミュニケーションについて考察することとしたい。

まずはじめに、コミュニケーションの成立ならびにコミュニケーションスキルなどの理論的な土台について講述し、これらを踏まえつつ教育のさまざまな場面において要求されているコミュニケーション力に焦点化してさらに論を進めたい。ここでは具体的には、教員と児童生徒、教員と保護者、児童生徒相互間などについて事例を挙げながらコミュニケーションの特質について吟味したい。

## 教育学特別演習 I

Seminar for Master Degree I

2単位

## 教育学特別演習 II

Seminar for Master Degree II

2単位

## 教育学特別演習 III

Seminar for Master Degree III

2単位

「教育学演習」I、II、IIIは、教育学研究の基礎となる方法論を学ぶことを目的としている。それぞれの研究領域によってその進め方や方法論が異なるので、受講者は自身の研究テーマに即した演習を選択し、各学期当初に担当者とともにコースの進め方、文献の選択などを打ち合わせることとなる。担当者は基本的に修士論文指導も兼ねる。基本的にIからIIIまでは同一の担当者がこれを行う。修士課程での研究生活の中心となる科目である。

## 課題研究演習 I

Seminar for School Administration I

2単位

## 課題研究演習 II

Seminar for School Administration II

2単位

本演習I、IIは、学校運営研究コース受講者を対象とする演習であり、そのテーマは学校運営に関するものに限定されるので、それ以外のテーマを選択する場合には、「教育学特別演習」を選択しなければならない。受講者は自身の研究テーマを明確にし、各学期当初に担当者とともに研究の進め方、文献の選択などを打ち合わせることとなる。担当者は基本的に課題研究指導も兼ね、I、IIとも同一の担当者がこれを行う。